

現役はいま



明日の100年へ、山城路上100年からの旅立ち

路上部のマラソンボックス。夜も暑く、汗の匂いが鼻を打つ。足中から山道へ、運動のほかにぬぐるか、薄手服と着られるボックス。膝から山道も多いが、ボックスの両側は安通。今は本館直前東園寺橋の東側にある。道幅が狭く学校へ行ったため、中を見せでもなかった。暑い、湿しめ、雨雲の匂い、夜も今も変わらない。マラソンのイラストもあった。駅前の風景もあった。駅前のメンバーの名前もあった。山城路上100年からの旅立ちも、道程も、今年に明日への旅立ちを思いでもあった。

自分の路上競技に対する意識

（2年生）

- 南川 哲也 二年最後の冬半練も走り終え、日々練習する。
- 西田 哲貴 練習に正業から向き合い自分自身を磨いていく。
- 小塚真司 自分に厳しく、目標を自ら常に上を目標していく。
- 北川 聖夢 最後の最後まで自分の限界に挑戦する。
- 橘 真帆 早くスパートに立つため、自分に足りないものを身につけ練習に行く。
- 渡辺 阿斗 1日に向けて練習に臨み、1日で夜を眠らせるよう練習する。
- 長谷川貴希 1日に向けて自分に甘えず、チーム一丸となり日々成長していく。
- 林 悠実 自分の目標を目標で終わらせることのないよう、逃げ道は探さず、
- 林 明伸 どんな道にも失敗も、明日への糧となると思え、一步一步減速に思ひ、
- 松本健太郎 何り少ない時間を大切にし、悔いのないよう練習していく。
- 子生 有紗 悔いなく終われるように日々の練習で自分を磨き上げて取り組む。
- 横田 夕佳 誰にも負けない強い心を持ち、最後まで諦めず、練習に臨む。

（1年生）

- 石川 南帆 毎日少しずつの積み重ねを無駄にしないよう諦めずに耐えていく。
- 石川 悠希 今も出ていないことを一つでも出来るように練習に臨む。
- 上田 蓮也 一秒でも長く競技場に立てられるよう真剣に練習に取り組む。
- 北川 真帆 努力し続け粘りと根性を鍛えるため、練習を一生懸命頑張る。
- 内藤 真希 大きな目標に向かって、常に目標から一歩努力する。
- 渡本 風沙 しんどい時でも粘り、試合では一本一本を大切に。
- 引野 和香 自分の目標になる努力をする。
- 松本つばき 自分の強い気持ちに負けず、一日一日の練習を大切にしていこう。
- 八木 聖 自分に甘えずに過去の自分を乗り越えるため、懸命に取り組む。
- 室田 南花 本番で結果が出るように日々の練習を大切にしていこう。



輝きの1日選手たち

高校で陸上競技をやって、走って、投げて、跳んで、その選手は、全国高校選手である。高校インターハイ。山陽地区1年5年間の歴史。京都から京都へ、そして輝きの全国大会へ。どれだけの選手がこの瞬間を体験したのだろうか。別表は選手理事長が京都陸協と高体連事務局で調べた山陽地区陸上競技選手のインターハイ出場記録である。昭和52年、関谷園の走り高跳び、石原智子さんから平成21年、関谷1 園の3年江藤雄、神内陽年さん(関早稲田大学大学院)まで、合わせて15人。山陽地区上、選手の人々である。関り園から関を関士では、出場者記録がない。この全国インターハイで、別表會に上がったのは、ただ一人、神内さんだけで記録だった。その翌に出、神内さんに喜ばせてもらった。

卒業年(回)	氏 名	種 目	出場年	学 年	備 考
532年(3回)	石田裕子	走り高跳び	531年	3年	
532年(3回)	八木正史	棒高跳び	531年	3年	
533年(10回)	山本静己	走り高跳び	532年	3年	
535年(12回)	小西勝洋	400m	534年	3年	
539年(16回)	井治公俊	砲投げ	537年	2年	
539年(16回)	西田静彦	二股跳び	537年	2年	
		走り高跳び	538年	3年	
547年(24回)	奥居千加子	400m	546年	3年	
552年(29回)	加藤 忠	100m	551年	3年	
580年(27回)	関本(中) 美幸	200m 100mハードル	580年	3年	この年京都 国 女子 総合優勝
582年(29回)	日下晴花子	100mハードル	581年	3年	
611年(52回)	中川雅寛	400m	H10年	3年	全国7位入賞
614年(54回)	古河 将	400mハードル	H12年	3年	
615年(55回)	松本 悠	二股跳び	H14年	3年	
620年(60回)	佐藤慶行	400m	H19年	3年	
621年(61回)	神内陽年	200m障害	H20年	3年	全国3位入賞

530年以前の出場者記録が京都陸協、高体連事務局ともありません。

山城高校陸上部

一〇〇周年記念アルバム

1961年 土田 顧問時代



布川・増田顧問時代



増田顧問時代



増田・林・太田顧問時代



林 顧問時代



林 顧問時代



林 顧問時代



林・澤田顧問時代



澤田・川村顧問時代



川村顧問時代



川村顧問時代



川村・野々口顧問時代



野々口顧問時代



昭和56年度



昭和57年度



野々口顧問時代



野々口顧問時代



編集後記

山城高校の歴史、京都二中に降る戦雲が誕生したときを記憶とは、どんな時代だったのだろうか。戦争が起つてくると別物になって、平素を離れて、ボーイスクウトやボウリングに習熟を告げて、第一次世界大戦が勃発した年だった。西暦でいうと1914年、和暦では大正三年である。国号では大日本帝国、シーメンス事件、東京新聞開業、平井氏、京都女子新聞誕生（ひとつはあった）、三平・山城師上座1910年頃でこの年に遷が断絶したということでもなく、運動場が完成したというのが、戦前であり、歴史の的どころである。

どうしてこの年を採るか、平和委員会選定だった時代からみればこの年の歴史であり、どれだけの先輩後輩が三平・山城のユニフォームを着たのだろうかと思つて、高校同僚間で伝説アルムの師上座を採ることに、ユニフォームは黒、白、赤と変わり、顧問の先生が必ず写っていて、半世紀の歴史を浮き出してきた。母兄の一番、三校通ひのオリンピック選手、長谷川健二さん、後から三平・山城の誇りである、個人戦には監督としてのお望みもあり、心算博とて、黒髪短髪サシナシ、1日入賞選手一騎、黒髪のお兄の心算博、現役一羽など、野口龍門、藤井孝幸氏々にお世話になつた。そして何となくでも森林を見てみると、森、奥山、ホームベース、毎月のユニフォーム着替え、三平・山城師上の歴史を語ってきてもいい。おもしろいおもしろいので、次のときも歴史へパトロールとスエスを通して、後世に伝えたい。

(後略)



京三中・山城師上座下編後編 二〇〇年史

発行 2014（平成26）年11月28日

発行所 山城師上座（山城高校師上座のり会）

〒611-0101

京都府城陽市久美北堀内1番地2

藤井孝幸 発行

印刷・製本 古閑舎社（株）

4-4-4 1155-2000